

## 1、活動内容

COVID-19 感染拡大に伴う学校閉鎖を背景に教育活動の大幅な変更や各種イベントが次々と中止となり、計画していた ESD 関連のプロジェクトを進めることが困難となった。そこで活動計画を見直し、できることを進めた。

### (1) 黎明グリーンプロジェクト (Reimei Green Project) 2年ね

本校サッカー場を天然芝にするプロジェクトの2年目。1年目の冬を越えて、補植のための苗作りを4月に開始。育った苗を痛んだり根付きが悪かったエリアに補植。(6月)天然芝の育成プログラムは順調に進んでいる。緑化や環境に関する学習のテーマとして学校全体で取り組んでいる。

地域スポーツの拠点として大会の開催などを計画していたが新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大の状況下で全て中止することになった。学校再開後は体育の授業で芝のグラウンドの活用を奨励。体育館での授業を可能な範囲で芝のグラウンドにシフトして実施した。



6月 天然芝グラウンドの補植作業の様子

### (2) 渡辺紫帆さん(パラリンピック選手)特別展示会・講演会

これまでも本校と交流のあるパラリンピック 2012 ロンドン大会に出場した渡辺紫帆さん(銚子市在住 視覚障害 陸上競技 走り幅跳び・100m・円盤投げ)のメモリアル

特別展示を11月から校内展示コーナーで開催。渡辺さんから日の丸のついたブレザー（開会式・閉会式で着用）や実際に着用して競技に挑んだユニフォーム、ジャージ、選手IDカード、6位入賞の表彰状、スパイクなどを借用し、生徒や来校者に公開した。3月には卒業生に向けた特別講演会を実施予定。パラリンピックを通して共生社会やノーマライゼーションについて学ぶ。



展示風景(上) 選手証(下左) 日の丸がついたブレザー(下右)

### (3) オリパラを機会にSDGsを学習

SDGsにおける17のゴールを黎明ラーニングメソッド講座で学習。内容としては17のゴールの下に設定された169のターゲットの背景を調査し、短いキャッチコピーを考えることに取り組んだ。その成果として、SDGs169ターゲットアイコン日本版制作委員会による「SDGs169TARGETSアイコン日本版制作プロジェクト」に169すべてのターゲットのキャッチコピーを作りエントリーした。3月に完成版が発表されるので採用されたものがあればうれしい。

17の目標のうち、特に「3、すべての人に健康と福祉を」「10、人や国の不平等をなくそう」「16、平和と公正を全ての人に」「17、パートナーシップで目標を達成しよう」などのテーマを、TOKYO2020の開催によって身近に感じるであろうことを予想して学習に取り組んだもの。

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



#### (4) Everton Park State High School との Web 交流

昨年 2 月下旬に実施した本校のオーストラリア研修のプログラムのひとつとして訪問し、交流会を行った Everton Park State High School (ブリスベン) の生徒と Web (Skype) で再会。(9 月) 訪問の際には TOKYO2020 オリパラの公式グッズをお土産にしたこともあり、日本訪問のお誘いをするなど、友好関係を深めた。



2月下旬に訪問した Everton Park State High School(オーストラリア)にて

## 2、来年度の活動計画

芝プロジェクトは開始から 3 年をファーストステップとして計画したもので、次年度がその 3 年目にあたる。芝密度向上や凹凸補修などの管理をしながら地域に解放してゆく計画に変わりはないが、開放や公開のイベントプランの実施は不確定な状況。グラウンドの使用と管理については、生徒による課題研究のテーマとなることや、使用前後に簡単なメンテナンス(目土入れなど)を行うことを義務付けることでスポーツの周辺にある環境づくりに配慮できる感性を養いたい。

延期された TOKYO2020 オリンピック・パラリンピックの開催は感染症対策をベースに大きな変更が生じるのかもしれないが、国際理解やグローバル・シチズンシップを学ぶ好機として積極的に活用したい。COVID-19 を乗り越えて世界の希望となる 7 月の大会開催を応援し、SDGs につながる学習を推進してゆく。(観戦、成田空港でのおもてなし隊などへの参加をイメージしている。)

本校が長年にわたり活動してきた地域のボランティアが全くできなかった。八街市が展開している幼小中高連携教育の活動もままならなかった。教育活動の緊急的な再編成もあり、他者との関わりに関する時間を確保することができなかったのも一因であるが、今年は何もできなかったと嘆く生徒もいる。毎年多方面からお誘いいただくボランティアへの参加希望は高く、生徒の能力開発の視点からも重要な機会と考えている。次年度の With コロナ社会の中でボランティアの形にも変化が生じるものと思われるが、その中でどう関わるのか、何ができるのかを考えて実践する教育機会としても継続したいと考えている。